



七 いよいよ降臨

あーあ。暇やなあ。以前は、毎日が仕事、仕事で、寝る暇もなく、移動中の車でも、ネタを考えていたけど、今は、自由や。ご飯も食んでええし、仕事もせんでもええし、いつでも眠たいときに寝とったらええから、こんな楽なことないわ。こんなやつたら、早う、死んでもよかったわ。それにしても、死んでも、こうして街の中をうろうろと彷徨うとは思わなかったわ。死んだ後、たましいが空に向かって浮いて行って、後一步のところまで天国の門が見えたんやけど、急に後ろ髪が引っ張られて真っ逆さまに落ちていったんや。こりゃ、いかん。このままでは地上に激突や、死んでしまうわと思うたら、いや、もう死んだんのか、スカートがパラシュート代わりに開いて、ふわふわと着地できてよかった。おかげで、愛用のピンクの毛糸のパンツが丸見えで恥ずかしかったわ。まあ、たましいパンツなんて誰も見てないとは思うけどな。それにしても、たましいになってまで、なんで、あたしはスカートや毛糸のパンツを這いとんかいな。助かったからよかったものの、不思議でかなわんわ。それに、後ろ髪を引かれるとはこんなことかいな。まさか、死んでから、こんな体験するとは思わなかったわ。

ほんまに、誰かがあたしの髪を引っ張るとんやろか。後ろを振り向いても誰もおらへん。そう言えば、街中では、病院やらマンションから、たましいがどんとんと空に上っていくのが見えた。でも、中には、自分の家や病院の周りをぐるぐる回っているたましいもおる。ガードレールの近くに置いている花束の側で蹲っているたましいもおる。あのたましい、交通事故で死んだんかいな。それにしても、相方のいないよちゃんはどうしてんのやろ？元氣してんのかいな。お笑いやっとんかいな。あたしもやったけど、あの娘もお笑いしかないから、舞台にたつとるやろ。新しい相方みつけたんかいな。天に召されず、ふらふらするし

かできんのやつたら、ちよつと舞台を観に行ってみようか。たましいやから人間には見えへんやろ。タダで入れるで。もちろん、金もないけど。

いたよのたましいは、生きていた頃、立っていた演舞場に向かった。空中にふわふわ浮いていけばいいので、タクシーやバス、地下手に乗らなくてもよかった。ただ、風にはまいった。街中には、至る所に風が吹いていた。ビル風だ。生きていた時には、建物の中やタクシーに乗るなど、あまり外気に触れなかったもので、それほど気がつかなかったが、ビルとビルの間には風が吹いていた。ビル風だ。ビルとビルの中の狭い空間を空気が通るため、風が起こるのだ。そこの間を通ろうとしても、向かい風に煽られて前へ進まない。かと思うと、急に、背中の方から風を押されて、その間を通り抜けることができた。喜んでると、すぐに角を右に曲がらないといけないのに、風が強くて、角を

大きく通り過ぎてしまう。慌てて、戻ろうとするものの、向かい風なので、前には進まない。道路のガードレールにしがみついて、風が吹かなくなるのを待つ。足がないこと、足場が固まらないことがこれほど大変なことだと思わなかった。

ビル風だけでない。道路の上を進もうとすると、自分の前を走る車の風に煽られて、後ろに吹き飛ばされる。車風だ。すると、反対車線を走る車の風に煽られて、今度は、大きく前に進む。やったあと小踊りしていると、再び、後ろから車が走って来て、その風の勢いで、元の場所に連れ戻される。結果的に、同じ場所でとどまっただけで、とても目的地の演芸場までたどり着けそうにない。

道路がダメなら歩道だ。いたよは道路を抜けだし歩道にたどり着いた。だが、歩道でも、多くの人が行き交い、その度ごとに風が起こる。人間風だ。そのため、前に進んだり、後ろに戻ったりして、結果的に、同じ場所でとどまっている。

それなら、できるだけ風の抵抗を受けない地面に這いつくだけだ。いたよはふわふわする体を道路のすれすれにまで近づけて、ほふく前進する。歩行者たちは、いたよの頭や背中、お尻、ふくらはぎを遠慮なく踏みつけていく。が、歩行者の靴はいたよの体をすり抜けて地面を蹴るだけなので、いたよに痛みはない。だけど、人々の足が自分を串刺しにするのは、痛みはないものの、嫌な気持ちだ。風の影響は受けるのに、人間の影響は受けない。たましいって、変な体や。これって、お笑いのネタに使えるかな。

たましい通信ってのはどうやら。あれこれと考えているうちに、目的地の演芸場が見えた。あと、ちょっとだ。だが、すぐ側には演芸場に行く人が利用する地下鉄の出入り口がある。お客さんがどんどんと上がって来ては、演芸場に下りていく。みんな、漫才や落語なんか、お笑いが好きなんだ。ありがたいなあ。いないよちゃんも舞台に立っているかなあ。と、思う間もなく、電車が駅を出発したのか、地下鉄の出入り口から風が噴き出てきた。あーれーの声とともに、たましいの体は吹き飛ばされた。演芸場まであとわずかの距離だったのに。

ちえっ。またか。目の前には演芸場の入り口。だが、そこまでには、地下鉄の出入り口という大きな試練がある。その入り口をじっと見つめる。人の動きがない。いまだ。風の抵抗を受けないように、ふわふわする体を押さえ、地面に這いつくばって、すばやく進む。抜けた。地下鉄の出入り口を越えた時、演芸場から多くの観客が出てくる。午前中の舞台が終わったのだ。まずい。思う間もなく、いたよの方に人が向かってくる。地下鉄に乗るためだ。前進する人から空気の圧力が向かってくる。いたよは歩道に這いつくばったものの、圧力風に押し出されて、再び、遙か彼方に吹き飛ばされた。

いたよは何度か、前進と吹き飛ばされることを繰り返して、ようやく演芸場にたどり着いた。その時には、もう、周りは暗くなっており、観客は誰もいず、全ての舞台が

終わっていた。

いないよちゃんはもう帰ったかなあ。いたよは演芸場の看板を見る。ない。いないよちゃんの名前がない。上から下まで、下から上まで、漫才、落語、歌謡ショー、マジック、漫談、お笑い劇場と、何度も繰り返して看板を見るけれど、いないよの名前はなかった。まさか。いないよちゃんはお笑いをやめたのか。

いたよは自分の自由にならないふわふわする体を何とか動かしながら、演芸場の中を、いないよの姿を探し求めた。舞台は既に終わっていたので、芸人たちはいなくなっていた。演芸場の廊下や控室を探し回ったが、やはり、いないよは名前の通りいなかった。

誰かが急に廊下から飛び出してきた。いや、いたよが飛び出したのだ。だが、いたよの体は人間とぶつかることなく、そのまま通り過ぎる。あっ、マネージャーだ。いたよがぶつかった？のはかつてのマネージャーだった。

「ちょっと、マネージャー」いたよがマネージャーに声を掛けるものの、マネージャーはどんどんと廊下を進んでいく。いたよはふわふわする体でマネージャーの後を一生懸命追いかける。やっと、追いつくと、久しぶり！とマネージャーの肩を叩く。

驚く、マネージャーの顔。いたよちゃん、生きていたの？もちろんよ。ほら、どう。でも、体はこの通り、ふわふわしているけれど。いないよちゃんはどこ？元気にしているの？看板に名前がないけれど、お笑いはやめてしまったの？と、会話がはずむことを期待していたいたよだが、マネージャーはいたよに気付くことなく、部屋の中に入った。そうか、あたしの声は聞こえないのか。あたしの体は生きている人には気付かないのか。じっと手を見るいたよ。その手を顔に近づける。顔に触れる。手は皮膚を触らずに、いたよの後頭部を突き抜けた。ひゃー。ホラー映画だ。慌てて、手を元に戻し、再び、じっと手を見る。これじゃあ、だめだよな。あらためて、自分が実体のないたましいだと知る。何でやねん。風の抵抗は受けるのに、人の体は触られないなんて。理不尽や。非常識や。金かえせ。と叫んだところで、どうしようもない。

でも、この体だからこそできることがあるはずだ。ピンチはチャンスだ。いたよはマネージャーが入った部屋のドアを真正面から正々堂々と何の抵抗もなく通り過ぎた。

部屋の中には、マネージャーと舞台監督の山ちゃんがいた。山ちゃんとは三十数年のつきあいだ。「やまちゃん」死んで以来、久しぶりに会ったので、喜んでハグをする。が、いたよの両手は、やまちゃんの両肩をすり抜け、交差した両手はいたよの体もすり抜けた。

あちゃー。これってお笑いだね。死んでからも、まだまだネタが尽きない。生きる？

こと自体がお笑いなんだ。これからは異界通信って、お笑いでもやろうかなあ。あれこれとお笑いのネタを考えるいたよ。それよりも、いないよちゃんのことを心配だ。ちょうど二人がいないよちゃんのことをしゃべりはじめた。あたしの声は届かず、また、あたしの手も人に触ることもできないけれど、人の声は聞こえる。よし。二人の会話にちょっと耳を傾けてみよう。

「どうなの。いないよちゃんは」やまちゃんは椅子に座った。これからじっくり訊こうとする姿勢だ。

「相変わらずね」マネージャーは腕を胸に組んだまま、突っ立っている。

「相変わらずって？」

「人前に立てないの。いいえ。人前には立てるけれど、しゃべれないの」

「ネタがないのか？」

「ネタはあるみたい。本人はお笑いのネタを一生懸命考えたり、ネタ帳に付けているようよ。でも、舞台に立って面白いことを言おうとすると緊張して言葉が出てこないのよ」

「そうか。まだ、時間がかかりそうだなあ」

「そうね。あれだけ実績がある人だから、もう少し待つわ」

「そうだな。待つしかないな。それで、いないよちゃんはずっと家にいるの？」

「ええ。買い物や病院に行く時以外は、家に閉じ籠っているみたい」

「それから変えていかないといけないな。今度、俺も行ってみようか」

「そうね。たまには、あたし以外の人が行った方が環境は変わっていいかもしれないわね。お願いするわ。やまちゃん」

「ああ。わかった。でも、なんて声を掛けたらいいのかなあ？いないよちゃん、みつけた。そこに、いたの？いないの？って、ギャグはどう？」

「そうね。まずは、基本のおやしギャグからね」

「そんなにマジに分析しないでくれよ。俺は素人だよ。俺も部屋に閉じ籠ってしまいそうだよ」

「あはははは。ごめん。ごめん。つい、仕事柄、お笑いを分析する癖がついているの」

「おやしギャグでも、おぼんギャグでもいいけれど、早く、いないよちゃんのお笑いが聞きたいなあ」

「それはあたしも同じよ。お客さんからも、いないよちゃんはまだって、よく聞かれるし、ファンレターだって、ほら、こんなにたくさん届いているのよ」

マネージャーは控室の隅に置いてあるサンタクロースがプレゼントを入れるような大きな袋を指差した。

「へえ、すごいなあ。いないよちゃんには見せていないの？」

「ファンレターが届いていることは伝えているわ。控室に置いてあるから見に来て、って話しているの。それが家から出るきっかけになったらと思って」

「ファンのみんなも自分の境遇をいないよちゃんに重ねて、それを突き破ることをいないよちゃんに期待しているんだろうな」

「そうよ。それがお笑いの力なのよ。後は、ほんのちょっとしたきっかけよ」

「そうだな。きっかけだな。俺のおやしギャグかも」

「まあ、それは万が一にもないわね」

「ひえー。手厳しいね。でも、早く、いないよちゃんのお笑いの舞台が見たいね」

「それは、あたしも同じよ」

二人はそのまま黙り込んだ。

そうか。そうだったんだ。初めて、いたよは今のいないよの状況を知った。舞台に立てないのか。人前でしゃべれないのか。いたよはいないよとのお笑い生活を思い出す。これまでだって、お笑いのことを考え過ぎて、あたしは拒食症になり、反対に、いないよは食べないとられない過食症に陥った。それでも、二人でその病気とつきあいながら、舞台に立ち続けた。そう。二人で。

だけど、あたしは死んでしまった。もういないよと一緒に舞台に立てない。いや、舞台の上に漂うことはできるけれど、自分の姿はお客さんに見えないし、いないよにも見えない、あたしの声はお客さんにもいないよにも聞こえない。これじゃあ、舞台に立てない。いないよはひとりぼっちになってしまったのだ。

今のあたしには、いないよを支えられないのか。こうして、ただ黙って、漂うことしかできないのか。また、拒食症になる。あっ、そうか。もう死んだのだから、食べる必要がないんだ。拒食症じゃなく、非食症か。何でギャグを言っているんだ。

あーあ。これからどうしよう。どちらにせよ、一度、いないよに会わないといけない。もちろん、会うと言っても、こちらが一方的に見るだけで、会話を交わすことはできない。だろう。それでもいい。いないよに会いたい。いないよは以前のマンションに住んでいるのだろうか。そこへ、行こう。行ってみよう。でも、その前に、あたしたちが立っていた舞台をもう一度見てみたい。いないよを救えるヒントがあるかもしれない。

いたよはたましいというふわふわする体に、いないよを何とかしたいという高揚する心が更に加わり、全身をより浮かび上がらせながら、観客がいない舞台へと向かった。

